



田松原は、江戸時代初期に植樹されたのが始まりとされる。最終的に7万本を数えた松原は、その景観を見物に来る観光客を呼ぶだけでなく、防潮林としての役割も果たしてきた。事実、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波などでは、市街地への津波の威力を軽減してきた。

だが、その松原も東日本大震災による10メートルを超える津波では根こそぎ倒された。残ったのはわずかに1本。その松は「奇跡の一本松」と名づけられ、モニユメントとして保存されている。

◆希望をつなぐ「ベルコン」

陸前高田市長の戸羽太氏は、2011年2月の市長選挙で初当選を果たす。東日本大震災が発生したのは、職務に就いてからわずか1ヵ月後の3月11日のことだ。津波は陸前高田の市街地の大半を飲み込み、岩手県で最悪の被害を生んだ。当選した喜びから一転、

ゼロから始めるまちづくり

岩手・陸前高田市震災復興事業
(2012年◆平成24年から実施中)

新田匡史
につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



市長は奈落の底に突き落とされた。「妻を亡くし、小学生の2人の子どもを抱え途方に暮れました。石を投げられようが、逃げ出そうと考えたこともありました」

市長が踏みとどまり、前に進むとした原動力は、子どもたちや高齢者の笑顔だったという。

「住民の生活を何とかしたい。その思いは職員も外部から応援に来ていただいた方も同じです。そのためには、良いまちをつくることしかないと思ったのです」

すべてがなくなったまちをゼロから興す。市は旧市街地を約10メートルかさ上げし、そこに市街地をつくる計画を立てた。それには大量の土砂が必要になるが、気仙川を挟んだ対岸の山を120メートルから45メートルまで削り、その土砂を運搬する方法を探る。

しかし、土砂をダンプカーで運搬すると8年はかかる。高齢化率の高い陸前高田では、復興にそれだけの時間はかけられない。最大の命題はスピードだ。解決策とし



てベルトコンベアの導入が決定された。1日の運搬量はダンプカー4千台分に相当する。8年を1年2ヵ月余りに短縮できるのだ。

「住民の要望は1日も早い復興です。ベルトコンベアは、その希望をつなぐ唯一の手法です」

市長はそう語る。気仙川を渡るベルトコンベア専用吊り橋は地元小学生に「希望のかけ橋」と名づけられ、今年の4月から稼働が開始された。

この復興事業を全面的に支援するのがURだ。陸前高田市都市整備局長の山田壮史氏は言う。「この復興は、地方の一自治体が対応できるレベルを超えています。とくに復興事業の根幹の部分は、URさんのお知恵をお借りすることで進められました。」

市長もこう語る。

「URさんのご努力のおかげでベルトコンベアが動き出し、住民にも復興の進展が目に見えるようになりました。ベルトコンベアは工事の短縮だけでなく、住民の気持ちも前向きにしたのです」

◆住宅と商店があつてまちになる

「ただ、ベルトコンベアは来年には役割を終えます。あくまでも復興の手段にすぎません」

そう語るのにはUR陸前高田復興支援事務所所長の桑島義也だ。

「復興は、土地を造成して終わりではありません。私たちは、復興

後のまちづくりにも責任をもって取り組むたいと考えています」
現在の計画では、すべての震災資料を揃えた図書館の建設、高田松原の復活、復興祈念公園も整備する。毎年地元住民が楽しみにしている「うごく七夕」や「けんか七夕」といった祭りが練り歩くルートも、まちづくりのプランに反映させている。

「そのほかにも、まちと住民にとっては大変なことがあります」
市の中心部の商店街で雑貨や地酒を販売していた磐井正篤氏はそう話す。その店があつた古くからの商店街は、震災前は「シャッター街」と呼ばれていた。

「正直、苦しかった。さまざまな手を打ちましたが、国道沿いの大型ショッピングセンターなどには太刀打ちできませんでした」
そこへ津波。磐井氏は「昨日まで酒を酌み交わした友人の半分が

いなくなった」悲しみと津波への恐怖で、商店街の再建どころか商売の継続すらも諦めたという。

「海好きが海を見るのも嫌になり、高台へ移ることしか考えられませんでした。かさ上げ地に住んでもいいと思えるようになったのは、つい半年前です」

磐井氏を救ったのは、市とURが主導するまちの復興だ。復興の進展が目に見え、住民が前向きになっているのには、自分だけが取り残されていないのかと考えたのではない。さらに、若い経営者の言葉も引き金になった。震災前は積極的ではなかった彼らが、真剣にまちの復興を考えていた。

「住宅が建ち並んでもまちとは言えない。一軒でも店があつてはじめて、そこがまちになるんだ」
店を出せば、そこが自分たちのまちになる。そう信じた人たちが商店街の再建を目指して動き始めた。

「ただ、国道沿いに大型ショッピングセンターが開業し、学校や病

院が高台に移転するなか、出店しても条件が厳しいのはわかっています。それでも住民と商店を近づけて『まち』にするため、できる限りのことはするつもりです」

ベルトコンベアは、7月に土砂の排出口が5ヵ所に増えた。総延長3キロがフル稼働を始め、復興スピードも加速する。来年5月末には土砂の運搬が完了し、事業は新たなステージに移る。

「明るい笑顔があふれるまち。それが陸前高田のまちづくりの基本です。高齢者、障がい者、子育て世帯など、あらゆる住民に優しいまちをつくりたい。復興の過程をぜひ見に来ていただきたいですね」

市長の言葉に磐井氏も続く。

「ここがどんなまちになるかわかりません。でも市とURさんと住民が必死に考えたまちには、誇りを持ちたいと思います」

街に、ルネッサンス

UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
[企画制作] 新潮社



陸前高田のベルトコンベア、総延長3キロがフル稼働。